

平成十七年度読書感想文コンクール作品集

もろく

大分工業高等専門学校
学生図書委員会
教員図書部会

目次

講評

入選 第一位	「テディ」を読んで	一般科目	国語科教員	相本 正吾	2
入選 第二位	「城の崎にて」を読んで	電気電子工学科	三年	高木 陽子	3
入選 第三位	「地獄変」を読んで	機械工学科	一年	花木 悠	4
佳作	「草枕」を読んで	都市システム工学科	一年	増谷 駿平	5
〃	「高瀬舟」を読んで	電気電子工学科	一年	政谷 賢祐	6
〃	「伊豆の踊子」を読んで	都市システム工学科	一年	橋本 健	7
〃	「天国の五人」を読んで	制御情報工学科	一年	河野万里絵	8
〃	「天国の五人」を読んで	電気電子工学科	二年	森永 千春	9
〃	「老人と海」を読んで	制御情報工学科	三年	岡田 直樹	10
〃	「車輪の下」を読んで	制御情報工学科	三年	西田 隆	11
		土木工学科	三年	岡野 寛雄	12

編集後記

学生図書委員長 松井 弘
(土木工学科 五年)

校内読書感想文コンクール(平成十七年度)

講評

一般科目 国語科教員

相本正吾

今回も、例年と同じく、まず、国語科目の夏休みの課題として提出された各クラスの読書感想文の中から国語科教員によって優秀作が選出され、次に、それらの優秀作に対して教員図書部会委員と学生図書委員によって第二次審査が行われ、さらに、国語科教員による最終の第三次審査を経て、入選の三作品(第一位〜第三位)及び佳作の七作品が決定されました。

第一位の榮譽を得た高木陽子さんの『「テディ」を読んで』は、小説『ライ麦畑でつかまえて』で知られるサリンジャーの短編集の中の一話を読んで、神童と称された主人公ティディの傾向や彼の語る思想に注目し、何かを愛する時の心構えについてあらためて考えさせられたことを述べていて、秀逸です。高木さんの原稿の筆記の美しさも審査員に好印象を与えたようです。

第二位を得た花木悠さんの『「城の崎にて」を読んで』は、交通事故によって自分の死を身近に感じた主人公が療養の温泉宿で三匹の生き物の死を体験した時の心境を、花木さんは丁寧にとどろつつ、生と死の関係や、生の重さにつ

いて思いをめぐらせています。私たちのうちにある「生」に対する強い思いを確認しつつ、生と死を偶然としつつも、その偶然によって私たちは生かされていると考えて、生きていることのありがたさや感謝の念に至った花木さんの思索が光っています。

第三位を得た増谷駿平君の『「地獄変」を読んで』は、自分の芸術への情熱と名譽のために自分の娘も含めてモデルの人々を犠牲にして結局は自死に至った絵師の悲劇を、増谷君は現代に置き換えて、自分のことを思ってくれる身近な家族や仲間の有り難さや、自己中心的な立場を脱してそういった身近な人々を大切にすることの大事さを考えています。第二位の花木さんの作品と同じく、思索の丁寧さや文章のしたたかさにおいて抜きん出ています。

次に佳作の七作品について見ていくなら、政谷賢祐君の作品は、非人情を唱える主人公(作者夏目漱石)に人としての温かさや描写の細やかさを感じ取った味わいのある作品になっています。

河野万里絵さんの『「伊豆の踊子」を読んで』は、旅芸人たちと同行していく中で彼らの純粋さや親切さに触れて互いに優しく素直になっていく主人公の様子を指摘していて、心温まるものがありました。

橋本健君の作品は、安楽死という問題をすでに先取りしていた森鷗外の名作『高瀬舟』を読み、安楽死や自殺という事態をめぐって当事者の苦しみということや「生きる」というテーマについて深く考察しています。

同じ小説を読んだ森永千春さんと岡田直樹君の作品は、天国で主人公に語る五人の人物の言葉に触れて、私たちの対人関係のありようについて、ともに深く考察を進めています。

西田隆君の作品は、ヘミングウェイの名作『老人と海』を読んでとてもかく面白かったことが巧みに語られていて好感が持てました。

岡野寛雄君の作品は、ヘッセの名作『車輪の下』のテーマを正確に考察していて、主人公の悲劇を今後の教訓としています。

古今の名作と呼ばれる古典は、その時代や未来を感じ取る作者の鋭敏な感受性によって、時代を超えて普遍的で大事な事柄やテーマを含んでいるのであり、今回入賞した皆さんは作品中のその大事なテーマを鋭く読み取り、かつ、現代社会や自分自身の問題に引きつけて、謙虚に我が身のありようを省み吟味しています。作者からほんとに難しい大きなテーマを突きつけられて、これまでの自分の基盤が揺らいでしまい自分の考え方や見方が不安定な状態に陥ってしまうこともあるでしょうが、評論家の小林秀雄が、「よい問いを出すことが大事だ。問いそのものが答えだ。」と言っているように、その状態は、より堅固な基盤や真理の獲得に向けて大事な出発点になります。そういう意味で、学生諸君には今後も良書との出会いとその後も続く対話を大事にしてもらいたいと思います。

入選第一位

『テディ』を読んで

電気電子工学科 三年

高木陽子

「テディ」というタイトルのこの短編小説は、『ライ麦畑でつかまえて』の執筆で知られるJ・D・サリンジャーによって書かれた九つの短編小説を集めた『ナイン・ストーリーズ』という自選作品集のとりを飾る作品である。『ライ麦畑でつかまえて』を読んでサリンジャーに興味を抱いた私が次に手に取った本がこれであった。私はサリンジャーの著書は哲学書に近いと考える。実際にその作風故に、脚光を浴びる一方で激しい批判をうけたり禁書扱いにされることもあったようである。そんな作風から香る刺激に魅了されてしまった私がとりわけ衝撃をうけ影響された作品がこの「テディ」という作品である。

この作品はテディと呼ばれる少年と、その両親、妹、接触をもった周りの人々とのかけひきを書いたものだと言える。しかし、一見どこにもあるかのように思えるこの小説だが、注目すべきはもちろん、題名でもある主人公の少年「テディ」の異色さである。テディを何か言葉で称するならば神童というのが近いであろう。そのテディは学者たちの話題であり、この話も

そんな学者たちに招待された挙句、長い滞在となった時の帰りの旅船内でのある日の出来事である。

読み進めて初めに興味をひかれたのは、ある舷窓から誰かによって海へ投げ捨てられたオレンジの皮を見たことによるテディの発言だった。オレンジの皮を眺め続けるテディは、オレンジの皮が浮いているのが面白いのではなく、そこにあることを自分が知ることが面白く、そして自分がそれを見なかったらそれを知らないわけであり、知らなければオレンジの皮が存在するということがすらすら言えなくなると言うのである。さらに沈みだした皮を見て、少し経つと皮が浮いているのは自分の頭の中だけになり、それは見方によってはオレンジの皮が浮くというのは自分の頭の中から始まったことだからだと続けた。そして部屋を出る際には、ドアから出てしまうと自分はオレンジの皮と同じように自分を知っている人の頭の中にしか存在しなくなるかもしれないとまで言った。私はこの発言から、物の存在の否定、そして自分という存在の危うさを感じて少し怖くなった。恐怖を感じたということは、やはり私も心のどこかで自分を否定されたくない、自分の存在を認めて欲しい、忘れないで欲しいと願っているのだろうと思え、素直に自分に向き合うことにもなった。やや極端すぎる発言ではないかと思いましたが、よく考えれば間違いだと言える要素もまるで無いのも事実である。

また、テディは感情というものに理解を示さない。自らは感情を持っているにしても、使っ

た記憶はないと主張している。しかし神を愛している、でもそれは感傷的に愛しているのではなくそんな愛なんてあてにならないと言う。それに両親のことも愛していると認めている。だがその愛は親近感という意味であり、自分たちが互いにめいめいの調和などの一部をなしていると言うのだ。しかし両親は、自分や妹をそんな風には愛してくれない、あるがままの自分たちでなくすこしばかり自分たちを変えないと愛せないのだ。両親の自分たちへの愛の大部分は、自分たちを愛する理由を愛しているというものだ、と加えて言っている。私は頭を揺さ振られた気分だった。なんてストレートに人間が、世間が直視することを避けている問題が如実に述べられているのか。確かに誰しも愛する理由を、何かを愛しているという自分自身を、愛しているという部分が多かれ少なかれあるのではないかと思う。それを認めてしまうのは、自分のもっている愛が偽物であるかのように思えてとても怖い。実際、テディの発言に愛を根本から否定されたようでショックに近いものを感じたのである。だからと言って全ての愛を疑ってかかる必要もない。ただ、何かを愛する時の心構えとしてこの発言を重く受け止めてもよいのではないだろうか。

私はこの作品に触れて、自分が普段そっと隠している部分を見つめ直すことができた。愛の重みを感じることもできたし、愛を勘違いしないように気をつけようと思うこともできた。

この本を人生の参考書としてそっと心の片隅において生きていけたらと思う。

入選第二位

『城の崎にて』を読んだ

機械工学科 一年

花 木 悠

「人は誰でもいつかは死ぬ。」ということは皆が知っていることだ。私も分かっているつもりだった。しかし、どれくらいの人が自分の「死」について考えたことがあるだろうか。私自身、この小説を読むまで「死」は遠い存在であり恐ろしいものという意識しかなかった。

この小説の中の「生きていることと死んでしまっていること、それは両極ではなかった。それほどに差はないような気がした。」という言葉は、私をとてても不可解な落ちつかない気分させた。私にとつて「生」は可能性に満ちたものであり、「死」は夢も希望も全て奪い去る恐るべきものだったからだ。

最近、若者の自殺のニュースをよく耳にする。インターネットの自殺サイトで、死にたい人同士が誘い合つて何人も一緒に命を絶つたというような事件が数多く伝えられている。そんな人たちにとつて死とは一体どんな意味をもつのだろうか。生きていくことよりも死を選ぶということは、自分の「生」に希望も可能性も感じられないからだろうか。自分の存在価値に自信がもてないからだろうか。生きるつらさから「死」

へ救いを求めたのだろうかと思像はするが、あまりにも簡単に「死」を選んでいるような気もしていた。しかし、自分にはあまり関係ないという気持ちだった。

この小説の主人公は、一つ間違つたと死んでいたかも知れない電車で撥ね飛ばされるという事故に遭い、城の崎温泉に療養に来た。その城の崎で、身のまわりにある小さな死を通して主人公が「生」と「死」について深く考えていくのである。

まず、一匹の蜂の死を見て、「冷たい瓦のように一つ残つた死骸を見ることは淋しかった。しかし、それはいかにも静かだった。…その静かさは親しみを感した。」のである。死の静かさに心をよせる主人公には、事故で助かつた命に対する喜びや自分の「生」に対する意欲はない心理状態なのだろうと思像できた。

しかし、次のねずみの死に出会い変わっていくのだ。魚串を頭に刺され、川へ投げ込まれたねずみが「殺されまいと死ぬに決まつた運命を担いながら全力を尽くして逃げ廻つていた」姿に「あれが本当なのだ。自分が願っている死の静かさの前にあるああいう苦しみがあることは恐ろしいことだ」と思うようになったのである。自分がねずみだつたらと考え、自分の怪我の時の様子を思い出し、生きるためにできるだけのことをしようと思ひ、ねずみと同じように何かしらの努力をしただろうと、「生」に対する自分が本来もつていた執着心を自覚することができたのだ。私は、人はもともと、「死」の静けさを願う心よりも、もっと生きものとして根つこの

ところに「生」への強い願いをもっているのだと思つた。

そして最後に、いもりの死に出会う。いもりの死は、主人公がいもりを驚かして水の中へ入れようと投げた石によつてもたらされたものだった。自分にそんなつもりはないのにいもりを殺してしまつた。主人公は、後味の悪さを感じながら、偶然ということを考える。いもりにとつて不意の死であり、自分がいもりだつたらと思像しながら、生き物の淋しきを感じたのだ。偶然に死んだいもりと偶然に死なずに生きている自分、生命のはかなさや運命に対する無力感を主人公は感じたのだと思ふ。

三つの小動物の死を通して、主人公は「死」について感じ方が変わり、自分の「生」について前向きになつていった。私が最初に読んだ時に違和感をもつた「生きてることと死んでしまつている…：それほど差はない…：。」という言葉が主人公の変化を読むうちに理解できたように思う。作者は、人間が本来もつている「生」に対する強い気持ちを大切に思ひながらも、今生きていること自体が偶然によるものだと言いたいのだろうかと思う。「生きている」と私たちは思つて日々生活をしているが、偶然によつて「生かされている」と言いたいのかも知れない。作者のいう偶然とは、運命とか神とかに言い替えられるのかも知れないと思う。偶然に生きている人間として「死」を考えた時、「生」の延長線上に「死」はあり「生」と「死」は反対の極にあるものではないのかも知れないと思うようになった。

短編小説「城の崎にて」を読み、私はこれま

で深く考えたことのなかった「死」について考
えることができて良かったと思う。人生とは、
生まれてから「死」までではなく「死」を含め
たものだと思えるようになった。そして、自殺
のように「生」を断念して「死」へ逃げ込むの
は、偶然によって与えられた「生」をいい加減
に生きたことになるのではないかと思うようにな
った。私は、これから偶然に生きていることに
感謝する気持ちを忘れずに、自分の「生」を
大切にしていきたいと思う。

入選第三位

『地獄変』を読んで

都市システム工学科 一年

増谷 駿 平

みなさんは「地獄変」という言葉を聞いてど
ようなことを想像しますか。おそらく、暗闇、
恐怖といった人間のさまざまな苦しみを思い
かべるでしょう。

この話の主人公は、良秀という腕のよい絵師
です。良秀はある日、大殿様から地獄の絵を描
くように頼まれました。その時から、良秀は悪
魔のようになります。

息絶えた者を紙に描く姿から、昔の優しい良
秀を想像できる人は、誰一人としていません

した。そして、ずっと可愛がってきた自分の娘
の命までも、絵のために奪ったのです。屏風が
完成して、良秀が得たものは、大殿様からの誉
め言葉ただ一つ。そして、失ったものは、重く
大きいものばかりでした。

良秀に残ったものは、たくさん命を消しさ
った罪悪感と、娘が炎に焼かれ苦しみを叫んでい
る姿でした。彼は、何よりも大切なものを失っ
てしまったのです。しかし、失ってしまったも
のは、もう二度と取り戻すことはできないとい
うことに、良秀は気づくことができませんでし
た。そして、その苦しみに耐えきれずに、良秀
は自ら命を絶つことになりました。

名誉も財産も手に入れた良秀の、恐ろしく悲
しい運命を見て、大金や宝石でどんなに裕福な
生活を送っても、そこに真実の幸せはないんだ
と思いました。

人間は絶対に一人では生きていけません。知
らないところで誰かを支え、誰かに支えられて
生きています。そして、人との出会いには別れ
が付きものです。そういった出会いと別れを繰
り返しながら、人間は成長し続けていくのだと
思いました。しかし、良秀はそのことに気づか
ず、多くの人達を利用してしまっただけです。そ
して、人々を喜ばせるはずの絵師良秀は、たく
さんの人々に屏風絵のような苦しみを与えてし
まったのです。

しかし、このような過ちを犯してしまうのは、
良秀だけとは言えません。現代に生きる僕たち
にも、同じことが言えるのではないのでしょうか。
目の前のつまらないものにとらわれて、大切な

ものを手放しがちです。お金や物より、自分の
ことを必要とし、思ってくれている人こそ一番
大切なものだと思います。一人孤独に生きるよ
り、みんなと笑い楽しく話が出来ることが何よ
り大切なのだと思います。人それぞれ大切なも
のは違います。しかし、僕に取っての大切なも
のは悲しい時、楽しい時、一緒に笑い、喜び、
泣ける仲間や友達、家族です。また、僕は他人
から他には代えられない大切なものだと思うれ
る人間でありたいです。なぜなら、人の命、人
の心はお金で買えない価値があるからです。ま
た、他人と比べてどちらがよいとか悪いとか、
そういうものでもありません。人の心というも
のの一つとして同じものはありません。自分と
いう一人の人間を、さまざまな角度から見ても
れるのは、仲間や友達、家族しかいません。自
分を見つめられる人の心こそが一生の宝なのだ
と思います。

僕は、この夏休みに大切な友達とおじいちゃ
んの二人を亡くしました。二人とも本当に一瞬
の事故で命を落としました。人間にはいつどん
な災難が降りかかるかわからないと改めて痛感
しました。そして、今に生きていることは本当
にすごいことなんだと思いました。いなくなっ
てから分かるその人の大切さがよく分かりまし
た。だから、今ある命を一生大事にしていこう
と思いました。

今、この世の中には、自分が嫌になり自殺す
る人や、相手が気にくわないとかで、人を殺し
てしまう人が多い気がします。しかし、その命
は誰から授かった命ですか。お父さん、お母さ

んから授かった何よりも大切な命です。お母さんは大変な思いをして子供を育み、お父さんも苦勞しながらも誰よりも可愛がり育てたと思います。そんな大切な命を簡単に扱っているということは、僕には信じられません。自分や他人の命をずっと大切にしていってほしいと心の底から願います。そして、今あるいは将来、両親に親孝行をしてあげて、今までの恩返しをして欲しいと思います。

あなたは人生を楽しく過ごしていますか。僕は、毎日が楽しいので、これからも心を明るくして楽しい人生を送れるように頑張りたいです。そして、周りの人の心も明るくさせるように一杯の努力をしたいです。

佳作

『草枕』を読んで

電気電子工学科 一年

政谷賢祐

夏目漱石の書いた小説『草枕』、人の世は住みにくいという概念をもった一人の画工が、絵を描くために旅に出ることから物語が始まります。

草枕は小説なので、もちろん文字だけで構成されています。にもかかわらず、ときおりその情景がはつきりと頭の中に思い浮かぶ場面があ

ります。例えば、次のような文が僕の頭に浮かびました。「鋸のような葉が遠慮なく四方へ出して真中に黄色な珠を擁護している。」この文の前には、これがたんぼぼであると書いてあるのですが、この文だけでこれがたんぼぼであると言うことが大体分かると思います。

主人公の画工は、旅先でさまざまな人に出会い、その人達の心に触れようとしています。誰か人に出会う度にその人を観察します。この画工は一見すると知的で冷たい人間のようにですが、実は温かいぬくもりを持った人間であるということが分かる文章が時々出てきます。しかし大抵はクールに振る舞っています。

また、この画工、常に写生帳を持ち歩き、そして自分の心に止まった情景を絵や、ときには詩や俳句として書き連ね、それからまた自分の書いた作品を見て楽しんでいきます。しかしこの画工も、「那美」という女性だけは理解することができませんでした。この女性はたゞ者ではなく、作品中では坊主と一夜を共にしたり、画工に対して色目を使ったりします。そのためこの女性は世間では「氣違い」や「変人」などと呼ばれています。本当は精神的に強い女性ですが、別れた夫が旅立つときに「憐れさ」を見せました。その「憐れさ」は画工の中にあつた心のつかえを取り除き、この女が「画」になると思わせたのです。これは僕の推測ですが、画工は不思議な、つかみどころのない那美に対して、「現実」を求めていたのではないかと思いました。最後にすべてが画工の中でつながつたのだと思います。一番頭に焼きついてる場面は、画工が宿に泊

まって寝ているときに、誰かが歌を歌っているのが聞こえてくる場面です。初め小声ぐらいだった声がだんだん遠のいていくので、画工が誰が歌っているのか知りたく思つて、こらえきれずに布団から出て障子を開ける、すると女の影が一つあつて、そのあとにその出来事をなんとか詩にしようと考えました。その時に次のように画工は言いました。「もし、怒りや悲しみを感じたら、とにかくそれを十七文字にまとめることいい。そうすれば、十七文字にまとめることに集中して、感情を忘れる事ができる。後に残るのは、怒ったり悲しんだりできる自分がいるという、うれしさが残るだけである。」と。この言葉は強烈に僕の心に残っています。

またこの画工は、画工だけでなく詩人でもあり、小説について、「小説の筋をよまなけりや、何を読むんです。」と、言つた那美に対して「小説も、非人情で読むから、筋なんかどうでもいいのです。」と言っています。この「非人情」について漱石は、「非人情は冷酷でない。世間と共にならぬだけである。」と言っています。これより「非人情」は「無人情」でなく、人情が無いわけではなく、ただ前面に出す事が無いだけなのだ僕が解釈しました。

実際の漱石がこの本の中の画工のようだったかは別として、草枕の登場人物達は最初から最後まで、一つのキャラクターを演じ続けていきました。この人情味あふれる登場人物達が、どこか話の中に入り込みやすくしています。そんな中、那美の精神力の強いキャラクターが一瞬でも崩れた所にやはり、「不自然さ」と「現実性」

が同時に存在し、結末がやや不安定になっているのですが、そこらへんも面白いと思えました。

漱石が草枕を書いたのは、漱石の文学作品の中でも初期であるのにもかかわらず、すでにこれだけのものが書けるという事は、漱石の文学に対するセンスの高さを示しているのではないかと思います。そして、私たちにとつて取るに足らないような事を見逃さないだけでなく、ただ文字だけですばらしく正確に描写していません。そのようなところに読む人を作品の中へ引き込む力の強さが出ているのだと僕は思います。

佳作

『高瀬舟』を読んで

都市システム工学科 一年

橋本 健

”ユウタナジイ“

それは、フランス語で、安楽死という意味である。筆者が読者に最も訴えかけたいことは安楽死の是非についてである。

現在でも、安楽死については、世界中で様々な議論がなされ、その考え方は様々である。安楽死とは、助かる見込みもない病人を、本人の希望に従って、苦痛の少ない方法で人為的に死なせることである。この小説の中では喜助とい

う一人の男が自分の弟の安楽死に関わったとして、島流しという罰を受ける。しかし、それは本当に正しいことだったのだろうか。喜助の話聞いた護送役の庄兵衛は考える。

この小説の筆者、森鷗外は自らが医者であったからこそ、このような時代を先取りした問題、安楽死の是非というものについて取り上げることができたのだろう。

安楽死を通して、読者に人生の意味について、もう一度考えてほしいというのが、きつと、筆者の願いだと思う。ここで、人生の意味ということについて考えてみると、僕には上手く説明することができない。難しい問題である。もちろん、様々な違いがあるだろうが、人はみな何らかの目的を持って、日々生きていくはずである。

しかし、その目的を見失った時、人は自殺をしたり、安楽死を望んだりするのだと思う。小説の中に出てくる喜助の弟も、自殺した時には自らの生きる目的を見失っていた。

「安楽死や自殺は、絶対に良くない」という考えの人が日本には多い。

しかしながら、本当にそう言いきれないだろうか。人には、本当に様々な境遇がある。それは、人によって全く違うと言っているほど多種多様である。自殺する人間の立場など、その自殺する人間以外は、絶対に察することはできない。安楽死を望んでいる人間の苦痛もその人間以外、分かり得るはずがない。

僕は、自殺や安楽死がいいことだと認めていくわけではない。その是非については、簡単には結論を出せないと思う。全ての人は、生まれ

た国、人種、豊かさ、健康状態など生まれた時点からみな異なり、不平等である。しかも、どんなに頑張っても、解決できない問題もある。

こうして、考えてみれば、喜助の弟の死も仕方なかったのかもしれない。自殺をはかった喜助の弟が、兄に「すまない。どうぞ堪忍してくれ。どうせ治りそうにもない病気だから、早く死んで少しでも兄きに楽がさせたいと思ったのだ。」と語りかける場面がある。この発言は、弟のわがままだとか、せっかくここまで兄弟が助け合って頑張ってきたのに……と考えることもできるだろう。

でも、僕は、弟が喜助の幸せを願ったことだと考える。小説の中には、喜助たちの生活の様子が詳細に書かれているが、僕には彼らの生活の様子は分かっていても、実際の大変さ、苦しさが、いまいピンとこない。ただ、つらかったらだろうか。今僕が思うのは、つらかったら、せんだなあとか、そういった程度にしか考えることができない。

結局、人は自分のこと以外、他人のことなど上手く考えられないのであろう。それは、他人のことを考える機会が少ないからであると思う。

護送役の庄兵衛が、他人である喜助について考える場面がある。しかし、ここでも、自分と喜助を比べてどうだというように、物事を自分中心に考えている。だから、他人のことを上手く考えられていない。僕自身もそうであると思う。物事を自分中心に考え、ついつい、自分にとっての利益を優先させたり、自分だけ良ければいいんだと考えてしまいがちである。しかし、

この考え方も世の中を生きていくためには必要な考え方であるのかも知れない。

安楽死というものについて、改めて考えてみると、安楽死は生物の命を操作する行為であり、殺人とすることもできる。けれども、本人が望むのであれば、安楽死を認めても良いのではないかと、というのが僕の考えである。"安楽死"というのもひとつの生き方ではないだろうか。

生まれてきてから、人は必然的に死に向かつて毎日を生きていく。誰もが、みな年をとり、最後には「死」というものが必ず待っている。そんな中で、人は様々な問題に出会い、それについて考えたり、周りの人に助けってもらったりして、一生懸命生きていく。今回、「高瀬舟」という作品に出会い、僕は、安楽死や自殺などを通して、「生きる」ということについて、深く考えることができた。そして、喜助や喜助の弟、庄兵衛たちから数多くのことを教えてもらったような気がする。

佳作

『伊豆の踊子』を読んで

制御情報工学科 一年

河野 万里 絵

私は今まで川端康成をはじめ多くの昔の有名

作家の作品を敬遠してきた。読んだとしても仮名使いが難しくまた、古語が多くて、きつと意味がわからないだろうと勝手に思っていた。しかし、今回この作品を読んだことが、私にとつていい経験となった。「伊豆の踊子」は物語の舞台こそ昔のものだが、主人公をはじめとした登場人物の思いなどは現代とたいして変わらぬように思えたからだ。

たつた一つ現代と大きく違うと思ったのは男性と女性の身分の差だ。物語の中では男尊女卑の考えが当たり前であり、男性が食べた鍋を後から女性がつつくなどということがごく普通に行われていた。男女平等が当たり前となつてきている今ではすぐおかしいことのように思えた。やはり現代の感覚では理解できないところも多少あり、昔と今の違いを考えつつ、読み進めていった。旧制の高校生である「私」は、自分が孤児であるために孤児根性がしみつき、そんな自分をひどく憂鬱に感じ、その息苦しさに耐えられなくなり、一人放浪の旅へと出る話だ。そして旅先の伊豆で偶然、ある旅芸人の一行と出逢い、旅を共にすることになる。自分をひどくひねくれた嫌な奴だと感じていた「私」は、旅芸人達の気さくな優しき、ちよつとした心遣いに触れていくうちに、徐々に自分からも優しさを出せるように成長していった。そして旅の中で「私」は、純粹で汚れを知らず花のように笑う少女「踊子」に惹かれていく。また踊子も親切で優しい「私」を意識しだし、「私」に淡い恋心を抱いていく。旅も終わりに近づき、「私」が下田から発つ日、踊子が自分のことを

「いい人ね。」

と話しているのを偶然聞いてしまう。踊子の無邪気な物言いに、「私」も素直に自分のことをいい人だと感じることもできた。そして「私」は人に親切にするのも赤の他人の事を心配することもごく自然なことだと思えるようになった。そこにはもう自分の孤児根性をひどく憂鬱に感じていた「私」はどこにもいなかった。

物語の主人公の「私」は二十歳だ。私達と同世代といってもいいだろう。「私」が最初に感じていた孤児だから人のことをうらやましがらなしかできないといったひがみ根性は、孤児であるなしに関わらず本来誰にでもあることなのではないだろうか。

「あの娘が素直でウラヤマシイ。」

「勉強ができてウラヤマシイ。」

こんな気持ちは常に誰でも持っているものだろう。必ず長所も短所もある私達は常に人と自分を比べ、劣っていると思ひ込み自己嫌悪に陥り、そんな事を考えた自分が嫌でひどく憂鬱になる、そんな事がしばしばだ。それに私もよく自分と他人とを比べてしまう。相手から優しくされても自分の事を考えるのが精一杯で、逆にやつあたりをして酷いことを言ってしまう。そして自分を嫌な奴だと思ひひどく落ち込む。私のメンタルな面が弱いといえればそれまでだが、みんなにもそんな気持ちがあるのではないかと私は思う。みんなそんな弱い自分と向き合い、自分を変えようと必死なのではないだろうか。しかし、自分でどんなに変わりたいと思ついても、人はそう簡単に変えられるものではない。

自分の持つていない物が何か気付いたとき、又自分に欠けている何かを持つている人に出逢ったとき、人は本当の意味で変わるのではないかと私は思う。この本でいうならば「私」は踊子に自分の持つていない純粋さ、素直さに気付き、徐々に惹かれていく。そして踊子と接していくうちに自分でも気付かないうちに変わっていくのだと改めて感じた。

踊子と「私」が出逢ったのが偶然だったのか、必然だったのかは私には分からない。しかし、この主人公は、踊子に会いたかったというひたむきさ、執念で必然のものとしたのだろう。知らず知らずのうちに踊子が「私」に与えた影響は大きいと思う。人の優しさがその人の人格そのものまでをも変えてしまうのだ。そして、きつとその優しさが連鎖し、たくさん人の心を変えていくのだろう。そうして、そんな優しい心を持った人が増えれば世の中も変わり、今、世界でおきている様々な問題をも解決されていくのではないだろうか。発展途上国の貧困、エイズなどの様々な感染症、地球温暖化などの環境問題、世界で起こる様々なクーデター、紛争、テロ、原因はどれも全然違うが、問題を解決しようとする心の奥底に優しさがあればきつとつか解決するのではないかと思う。作者が何を思っただけの物語を書いたか、読者に何を感じてほしかったかは私にはわからない。きつとこんな複雑な意味はないのだろうか。しかし、この物語が書かれた頃から世界は変わった。考えなければならぬ深刻な問題も増えつつある。

少し話が飛躍しすぎたかもしれないが、私は

みんなが優しい気持ちを持つて、それがみんなに広がっていけばいいと思う。大それたことではなく、優しさを持つて人に接したり、笑顔であいさつを返すとかそういう小さなことでもいいのだ。それが広がって日々の生活が優しさで満ちあふれたものになればいいと私は思う。

佳作

『天国の五人』を読んで

電気電子工学科 二年

森 永 千 春

天国の五人。この本は、主人公のエディが死んで天国へ行つて、エディの人生になんらかの理由で関わった五人の人に会い、地上にいた頃の人生を理解するための教えを教わる話である。

子どもの頃エディは、キャッチボール中に通りへ転がったボールを取りに行つて、車にひかれそうになったことがあった。寸前で運転手がブレーキをかけたためエディは助かったが、運転手はビックリして心臓発作で死んでしまった。この運転手が第一の教えを覚えてくれた人だ。その教えの中で、

「人はみな、お互いの人生がすべて交錯し合っていて、すべての物事はバランスが取れてるんだ。枯れるものがあれば、伸びていくものがある。

る。誕生と死はその一環なんだ。」

と述べている。その人の死はエディが生きるために必要な事で、無駄な人生や死はひとつもないと言ふのだ。じゃあ最近よくある殺人事件で「誰でも良かった」という殺人の被害者になつて亡くなった人の死はどんな意味があるのか、無駄死にじゃないのか、私は初めそう思った。確かに被害者はかわいそうだが、その事件によつて周りの人は、夜道を一人で歩くと本当に危ないと思つて注意し、次の被害者を出さずにすむかもしれない。考え方を変えればその人の死によつて、周りの人の命を救つたことになるかもしれない。

自然界でも、ウサギがキツネに食べられていのを見ることもかわいそうに思うが、ウサギはキツネが生きたために死ななくてはならない。そしてそのキツネもライオンが生きたために死ななくてはならない。本当に、誰かが生きるということは誰かが死ぬということだと思つた。

第二の教えの中では、

「みんな何かを犠牲にして生きてる。ときには貴重なものを犠牲にすることもあるが、ただ失うつて訳じゃない。他の誰かに譲つてやるだけだ。」

と述べている。確かによく考えてみると周りに犠牲はたくさん見られる。子どもを学校へやるために自分の時間を犠牲にして働く母親、病気の親を看病するために快適な町中の生活を犠牲にして田舎に戻る娘…。人はお互いに、特に親子は最初は親が子へ、何十年か後は子が親へ犠

性し合って生きている。犠牲は人生の一部だと思つた。

第三の教えの中では、

「憎しみは毒だ。憎しみこそ、自分を傷つけた人に対する格好の武器だと思つている人が多いが、憎しみの刃は湾曲していて、人を傷つけようとすると自分を傷つけることになる。」

と述べている。これは経験したことがないので分らないが、今まで憎しみを持たずに生きてきて楽しく生きてこれたので、その通りなのかもしれない。人間なので怒ることは誰にでもあることだ。だがそこで相手を許さなければ憎しみに変わってしまう。だから人は過ちを許せる広い心を、寛容さを培わなければならないと思つた。

第四の教えの中では、

「人生には終わりがあつた。だが愛に終わりはない。愛する人の思い出を愛することができる。」と述べている。これも私には分からないが、夫婦でどちらかが先に死んでしまつても再婚しない人の方が多いというのが、この教えが本当であることを物語っているとと思う。

第五の教えの中では、

「いなくてもいい人なんて一人もない。みんな必要な人だ。」

と述べている。エディは長年遊園地の機械整備の仕事をしてきた。毎日毎日ネジを回して、同じことの繰り返しの日々を送つてきた。そして「俺はつまらない人間だつた。何もなし遂げなかつた。負け犬だつた。いなくてもいい人間だつたんだ」と思つてきた。だが、エディは子

ども達の安全のためにいなくてはいけない必要な人だつた。目立たない仕事の人でも誰一人いなくてもいい人はいない。人は生きるためにお互いを支え合つて生きているから。私はこれから、この五つの教えを心に留めて生きていこうと思つた。

佳作

『天国の五人』を読んで

制御情報工学科 三年

岡田直樹

この話は主人公のエディがルビー・ピアという遊園地の（フレディのフリーフォール）というアトラクションの故障事故によつて死ぬ所から始まる。そして、エディは天国で五人の人物と話をすることになる。

一人目はブルーマンと呼ばれる人物であつた。ブルーマンの口にした言葉の中で印象に残つた言葉がある。その言葉とは

「他人一つていうのは、これから知ることになる家族なんだよ。」である。

僕はこの言葉を聞いて納得した。人は一人では生きられないと言うように、親兄弟をはじめとして親戚・友達など自分に関わつて来た全て

の人は自分の家族であり、自分を成長させてくれたのだという事を実感した。

二人目の人物はエディの軍人時代の大隊であつた。彼はエディに

「人は何かを犠牲にして生きている。」と言つた。

僕は今の自分が何か犠牲にして生きているだろうかと思つた。昔の人は勉強したくても家の手伝いをやらされて、全然したい事をする時間ではなかつた。それに比べて今の自分は時間をもてあまし、有意義な生活を送れていない。自分の生活を見直して意味のある時間を過ごしていきたい。

三人目はルビーという女性であつた。彼女がエディにこう言つた。

「憎しみは毒よ。あなたを内側から蝕んでいくわ。憎しみこそ、自分を傷つけた人に対する格好の武器だつて思つている人が多いけど、憎しみの刃は湾曲しているの。人を傷つけようとすると、自分を傷つけることになる。」

確かにそうかもしれないと思つた。最近、家族や友達を殺害したなどの事件をよく耳にする。しかも、その理由はと聞くと「だるかつた」とか「悪口を言われたから」等、なんら理由に成り得ないものばかりだ。どうしてそんな簡単に人を殺そうと思えるのだろうか。人を殺して自分が得るものとは一体何があるだろうか。牢屋に入れられ、自分のした事への罪悪感が積もるばかりである。何一つ良い事など無いのだ。そういう事を考えずに真つ先に行動に移してしまふ事が怖いのだ。自分のする事に自分で責任

を持ち行動していきたい。

四人目はエディの妻のマーガリートであった。彼女はエディに愛の強さを教えた。マーガリートはエディを残し四十七歳という若さでこの世を去った。彼女が死んでからもエディはマーガリートの事を愛し続けた。マーガリートは天国ですつとそれを感じていた。

僕は実際に現実ではどうだとか考えずに、本当にこんな風に離れていても気持ちが変わるといいのになあと思つた。

最後の五人目は小さな少女だつた。この少女がエディに伝えた事。それは、「人はみな、それぞれの存在理由がある」という事だつた。エディは生前、ルビー・ピアのメンテナンス係として様々なアトラクションの調整をしていた。エディには、アトラクションの整備をし、遊んでいく子供達の安全を守るといふ存在理由があつた。

では、僕にはどのような存在理由があるのだろうか。僕はまだ親に学校に通わせてもらつて勉強させてもらつて立場所であるので、まだ存在理由を探している状態なのだと思う。学校に行つて知識を増やし、また、資格を取つて自分の可能性を、存在理由を見付けたい。

この物語を読んでみて、一番に出だしにビックリした。今まで色々な本を読んできたが、一番最初の出だしが死ぬ所から始まる本はなかつた。面白い始まり方だと思つた。そして次に感じたのは、この本の言いたい事ははっきりしていると思つた。天国で会う五人の話には「犠牲」や「憎しみ」、「愛」などひとつひとつキーワードとなる言葉を登場させて伝えたい事をうまく

表現している。物語としても構成としても、とてもいい作品だと思つた。

佳作

『老人と海』を読んで

制御情報工学科 三年

西田 隆

老人と海、今回この本で感想文を書こうと思つたのは、中学生の時に一度友人に少し読ませてもらったからです。その時は全部読み終えることができずに続きが気になつていて、今回偶然本屋で見つけたので読むことにしました。またもう一つの理由としては、今回は時間もあまりなく、小説としては短い『老人と海』ならば、すぐ読み終え感想文にとりかかれると思つたからです。

そして、読んでみました。初めから分かっていたことですが、釣りの話でした。簡単に説明したら、これだけで終わってしまう小説でした。しかし、なぜ釣りの話がこんなにも面白く、感動できたのでしょうか。

前半は、老人と大魚との闘いの話がメインで、老人は見事に大魚を釣り上げます。このころは、老人に早く村に帰つて、釣り上げた大魚を村の人に自慢して欲しい、という気持ちで読み進んでいきました。

しかし、後半は釣り上げた魚に鮫サメが何度か襲つてきて、釣り上げた魚を次々に食べていきます。そんな中、老人は一人、鮫と戦い魚が全部食べられてしまうまで戦い続けます。そんな老人の必死の様子が伝わつてきて、私は、もう魚などどうでもいいから、どうかこの老人が無事に自分の村まで生きて帰ることができますようにと、祈るような気持ちで読みました。

老人が一人海の上で魚を釣り上げ、そして鮫と戦う、そんな老人の姿に私は感動し、この小説を面白いと感じました。

この話は、普通に考えたら、夢物語のような話です。老人一人で大きな船でもなく、小船で大魚と何日も戦い、ついには釣り上げる。それだけでもすごいのに、さらには襲ってくる鮫を相手に、一歩も退かず一人で、バツタバツタとなぎ倒していく…そんなことはありえないと思うからです。しかし、そんなことを少しも考えずに最後まで読めたのは、やはり作者ヘミングウェイの文章が読みやすく、とつきやすいことにあると思います。後に知つたのですがノーベル賞作品だそうです。

私にとって印象的だつたのが、老人のサンチヤゴが何度もしズムを繰り返すようにつぶやいていた言葉「あの子がいたらなあ」です。この老人の言葉に、私は老人の精一杯の激しい感情を感じました。そして、ギリギリまで切り詰めた老人の自分の肉体への限界、さらにそれに絶望しつつも魚と戦う強い意志の老人の姿を想像し、手に汗をにぎりました。

この言葉の中でのあの子というのは、サンチャゴを慕っている少年漁師のことです。彼はサンチャゴのためにいろいろと身の回りの世話をしています。そして、その代わりに、サンチャゴから漁や野球の話を聞いたりしています。この老人と少年のやりとり二人の仲の良い関係が描かれています。老人と少年の関係はとてもいいものだと思えました。

サンチャゴは単なる力の衰えた老人ではありません。長い不漁にもめげずに挑戦し続ける格好良い老人です。巨大な魚との闘いの中、老人は右手を網で切ってしまう場面がありました。しかし、老人は痛いだろうに泣き言一つ言わない、そんな凛とした老人の生き様に、私は感動しました。鮫との戦いも結局は負けてはしまいますが、とても立派でした。力は衰えたといえども、サンチャゴは長年の智慧と技術で、必死に鮫に対抗するものがなくなるまで戦い続ける姿にも感動しました。私のような若者であったならば、すぐに諦めていた、だろうと思うことに對しても全力を尽くします。そんな格好良い老人です。

こんな格好良い老人ならば、私も少年同様に、慕いたくなります。また、私自身も年を取るなら、こういう風に年をとって、この老人のようにになりたいと強く感じました。

サンチャゴの魚に対する思いも印象に残りました。老人は、釣られた魚を捕まえようと戦う半面、魚に愛情も見せたりします。そんな老人のやさしさも立派だと私は思いました。

この小説は、最後には、結局魚を全部鮫に食べられてしまっただけです。登場人物も老人と

少年しか出てこないし、会話も老人の独り言のほうが多く描かれています。けれど海の上でたった一人で戦う格好良い老人の姿に感動しました。今回、感想文のためにと読んでみた本ですが、また読み返したくなるような本だと私は思いました。

佳作

『車輪の下』を読んで

土木工学科 三年

岡野寛雄

僕はこの夏、「車輪の下」という有名なヘルマン・ヘッセの長編小説を手にとって読みました。普段読書などは全くしない僕でしたがこの長期休暇を利用してこの本を手にとりました。

「車輪の下」を読もうと思ったのは、このタイトルの「車輪」という言葉がどういう意味を持つのかに興味を持ったからです。そしてこの本を読み進めていくうちに「車輪の下」という意味が分かってきました。

「車輪の下」の「車輪」とは外部からの抑圧を意味していると思えました。主人公ハンスは釣りが趣味でひたむきな自然児でした。田舎に育ち、幼少時代は自然とふれあい、有意義な暮らしをしていたのに、周囲よりも頭が良かったために、大人達に期待をかけられ神学校へと進

む道を決めつけられてしまいました。子どもの頃に大人から期待されることは、とても嬉しいことだと思えます。僕も、小・中学校の頃に先生や親に誉められると、本当に嬉しかったことを覚えています。主人公ハンスの場合は、この期待が村中からのものだったので、なおさら期待に応えようと必死で勉強したのだと思います。しかしこの過剰な期待こそが少年の人生を崩壊へと導いてしまったのではないかと思えます。ハンスは周囲の声によって自分は神学校に行かなければならないと思込まされ、幼い時から自分の将来を決められていると思います。僕はこのようなことがあってはならないと思います。

しかし近年、「お受験」という言葉が出来たように、幼い頃から勉強させ、私立の有名な小・中学校へと進学させるとい話をよく耳にします。そしてそれに受かって、そのまま勉強していけば立派な大学や企業に入れるというわけです。たしかに記憶力が最も良い幼少期から勉強させることはいいことだとは思いますが、しかし、このように育てられた子ども達は、体を動かしたり遊んだりということを知らないまま育ってしまうのではないかと僕は思うのです。こんなことをまた子どもの僕が言うのもおかしい話ですが、僕は小学校から野球をして、いろいろな感動を味わっています。だから子どもの頃は好きなことをさせてあげてもいいのではないかと思えます。この本を読んで、さらにそう思うようになりました。

ハンスが神学校に入学してからの話は、著者

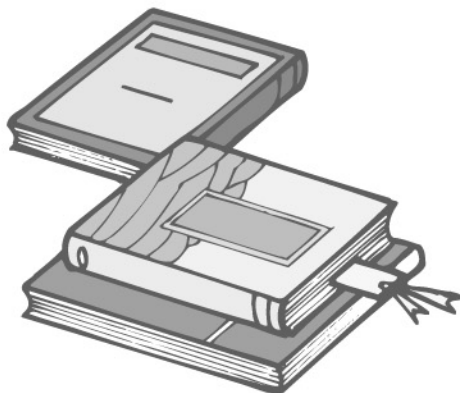
ヘッセが社会を批判するような内容でした。規則だらけの寮生活や、勉強の強要など、少年の心をすり減らすものばかりでした。中でもハンスの心を痛めさせたのは親友との関係を教師達に批判されたことだと思います。ハンスの親友ハイルナーは教師の評判が悪く、最終的には学校を去ってしまうという状況でした。これはひどいと感じました。先生には生徒の友達を選ぶ権利などないはずなのに、結局は彼から親友を奪ってしまったのだから。ハンスは気力をなくし成績も下がり、あれほど必死で勉強して合格した神学校を去りました。文章からも、少年ハンスの心情の変化が表れていて、自分が同じ状況にいてもハンスと同じ運命をたどっていただろうと思いました。

ハンスが故郷に帰っても、誰も彼には関心を持たなくなっていました。この時、彼に優しい言葉をかけてあげた人が一人でもいたら、彼も立ち直ることが出来たのではないかと思いました。その後は自殺を考えながらも、機械の見習い工としてやり直そうとしたのに、結局は川に落ちて亡くなってしまおうという結末でした。将来有望と思われていた少年のあまりにも短い、あまりにもみじめな最期だったと思いました。

著者ヘッセはこの小説を通して、大人のエゴで子どもを育てていく社会を批判しようとしたのだと感じました。

僕の人生を振り返ると、特に自分の意見もなく、夢もやりたいことも見つけられないまま今をなんとなく生きていく感じです。これからは、自分の意志をしっかりと持って生きていかなければ

ならないと思います。車輪の下敷きにならないように…。



編集後記

学生図書委員長
(土木工学科 五年)

松井 弘

何の因果だろう。私は図書委員長をするハメになってしまった。前世では物書きの類이었다のだから、それとも大英帝国図書館の館長でもしていたのだろうか。どちらにせよ戯言を呟いている暇はないのだ。この編集後記の締め切りが数時間後に迫っている。外では今年の初雪が降っているというのに、それを楽しむ余裕すら今の私にはない。とても残念だ。一体何が原因で私は図書委員長になってしまったのだろうか？少し思い出してみよう。

あの日、私は卒業研究の実験の打ち合せの為、研究室に行く予定で、昼休みの学生図書委員会を欠席するつもりだった。しかし、打ち合せが早く終わった為、学生図書委員会に顔を出したのが、そもその間違いだった。私が視聴覚室に入ると皆の視線がいつせいに集まった。遅れて来たのだ、当然と言えば当然だ。私は視線を合わせないようにして、とりあえず空いている席に座った。すると某図書委員のY口が話しかけてきた。今思えば、こいつの近くに座ったことが最大の原因だった。Y口は言った。「図書委員長がなかなか決まらないで困っている。こ

のままだと自分がやらされそうなので、やってくれないか？やってくれるのなら自分が副委員長をしてもいい」この時に、私は身に降る火の粉を払っておけばよかった。本当に馬鹿だった。クレイジーだった。うましかだった。何も考えずに首を縦に振ってしまった。数分後、私は図書委員長になっていた。ある先生は安堵の表情を浮かべ、またある先生は笑っている。一人だけ寝ている先生もいたが、名譽の為その事には触れないでおこう。私は一人、月曜だけにブルーマンデーな気分だった。

思い返して見たが、結局のところ私の優柔不断さが原因だった。誰も悪くない。私が悪いのだ。私に責任がある以上、務めは果さなければならぬ。ここからは図書委員長らしく書かせてもらう。

今回の読書感想コンクールは、どれも甲乙つけ難い優秀な作品ばかりでした。一人一人が個性溢れ、物語の主人公に対して自身を重ね合わせ書いているのが、よく伝わってきました。残念ながら入選を逃した作品もあるでしょう。しかし、そんな事は問題ではありません。本を読んだ、その感想文を書くという行為自体に既に意味があり、尊いものなのです。提出して下さった学生はより高い次元へと自身をステップアップできたことだと思います。

最後に夏休みの宿題に追われ忙しい中、読書感想文を書いて頂きありがとうございます。ここに感謝の言葉をもちまして終わりとさせていただきます。

P・S Y口ごめんなさい、君には咎はない。

「マユ」 第三十三号

発行日 平成十八年二月十日

発行者 大分市牧一六六番地

大分工業高等専門学校

学生図書委員会

教員図書部会

印刷所 有限会社 印刷良栄堂

住所 白杵市江無田五三組

電話 ○九七二一六二一二八六二